

第 60 回文化講座

発掘調査速報 2014 その 2

【日時】11月29日（土）13：30～16：00

【会場】沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

第 60 回文化講座

発掘調査速報 2014 その 2

沖縄県立埋蔵文化財センター
第 60 回文化講座「発掘調査速報 2014 その 2」

平成 26 年 11 月 29 日（土） 13 時 30 分～16 時 00 分

あいさつ 沖縄県立埋蔵文化財センター所長 下地 英輝
戦争遺跡（座波迫撃砲陣地跡・伊計島砲台跡・愛樂園早田壕）瀬戸 哲也 … 1
県内遺跡（船越原遺跡）宮城 淳一 … 8

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ ◇休憩◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

基地内文化財（大山加良当原第四遺跡・喜友名東原第四遺跡） 大堀 浩平 … 12
白保竿根田原洞穴遺跡 仲座 久宣 … 19

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ ◇質疑応答◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

戦争遺跡 (座波迫撃砲陣地跡・伊計島砲台跡・愛楽園早田壕)

沖縄県立埋蔵文化財センター

瀬戸 哲也

調査の経緯・目的

近代、主に沖縄戦において残された戦争遺跡について、文化財指定などの保存を検討するために測量等の記録調査を平成 22 年度から 5か年計画で行っています。平成 25 年度は、これまでの調査で重要性が指摘された沖縄本島の戦争遺跡について、測量等の記録調査を行いました。ここでは、その幾つかを紹介します。

糸満市座波迫撃砲陣地跡

座波集落北側の標高約 60 m の丘陵に、砲掩体と考えられる土坑 3 基、人工壕 2 基が残存しています。これまで、独立迫撃砲第 9 中隊が築造したと考えられていましたが、関連資料の精査により、独立迫撃砲第 8 中隊が昭和 19 年 10 ~ 11 月にかけて築造した可能性が高くなりました。資料によると、砲掩体は 12 基計画されていたようです。米軍上陸後は、第 32 軍司令部の南部撤退を契機に、5 月後半から 6 月にかけて、独立迫撃砲第 3・4・8 中隊が使用し、米軍との交戦で戦死者もあつたようです。砲掩体は、径約 4 m、深さ 2 m の入口を設けた土坑に、長さ 5 ~ 7 m の直線的な坑道を取り付けた構造となっています。土坑の部分に迫撃砲を据え、坑道部は従事する兵士の待避所などとして使用されたものと思われます。この砲掩体の方向から、主に北側への交戦が想定されます。人工壕は、両者とも 2 方向に貫通しており、1・2 か所の小部屋があるので、兵士の一時的な拠点であったものと考えています。



図 1 座波迫撃砲陣地地形図

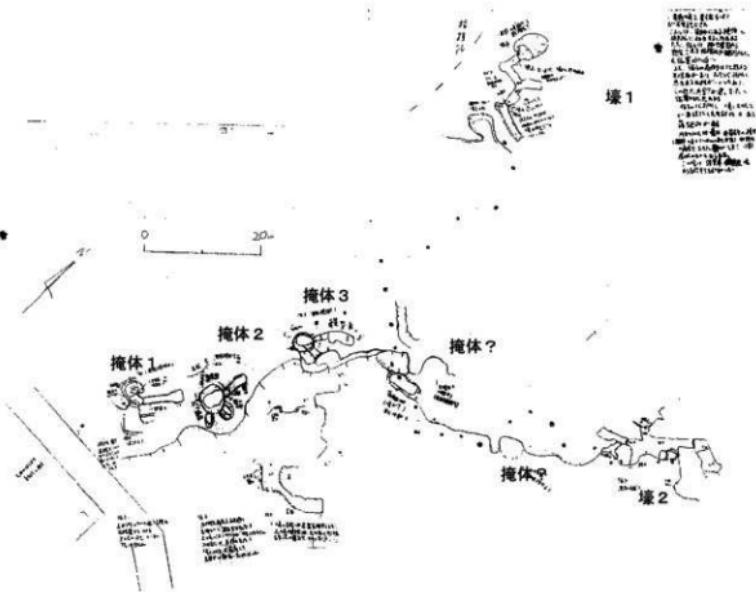


图2 贺数迫击炮阵地全体平面图

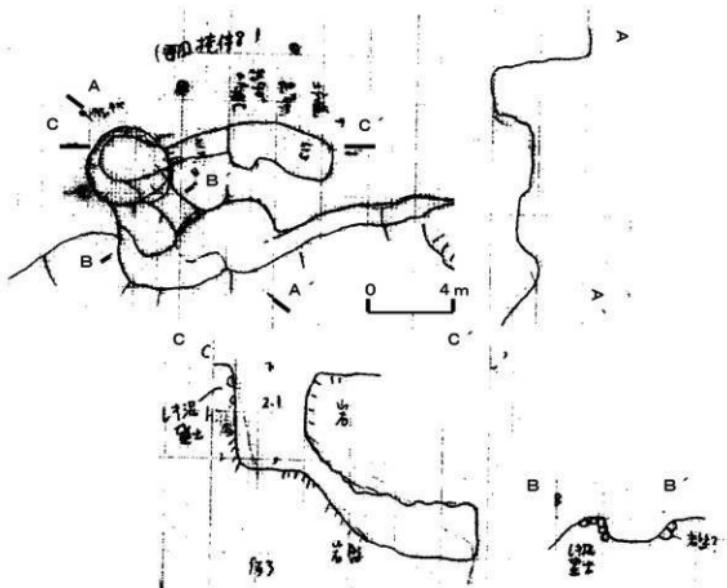


图3 掩体3平面·断面图

うるま市伊計砲台跡

伊計島の西方に現在は灯台がある場所に、砲台跡 2 基が確認されています。太平洋戦争開戦直前の南西諸島の海岸警戒のため、昭和 16 年 10 月に中城湾臨時要塞砲兵連隊第 2 中隊が伊計島に配備されており、おそらくこの関連部隊が築造したものと考えられます。両砲台は、径 1.6 m の砲座と、径約 6 m の周壁をコンクリートで造っており、弾薬庫は戦後の破壊により残っていないかたが、おそらく周壁に取りつくように 2 か所あったと見られます。東側の砲台には、周壁の床面に集水樹と海側に延びる陶器製の排水管を確認しました。また、前述の部隊の後身である重砲兵第 7 連隊第 2 中隊が南城市知念に移り築造したとされる知念岬にあるウローカー砲台跡とその構造が非常に類似しています。



写真 1 伊計東側の砲台



写真 2 伊計西側の砲台



写真 3 同左の排水升

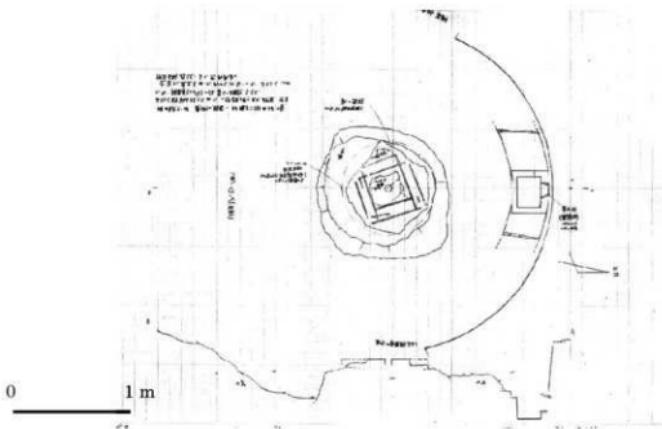


図4 伊計砲台 西側

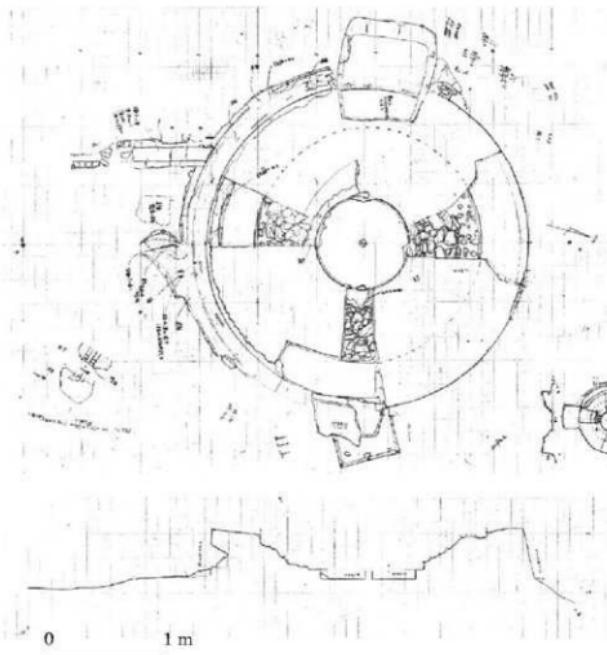


図5 伊計砲台 東側

名護市愛楽園早田壕

名護市屋我地島済井出にある避難壕群で、名護市教育委員会によると、50基の壕口が近年まで存在していたようです。この地は、昭和13（1938）年に沖縄県立国頭愛楽園として創設され、昭和16年には国に移管され、現在は国立療養所沖縄愛楽園となっています。

昭和18（1943）年5月には、初代園長塩沼英之助が寮舎の前に40名前後が退避できる無蓋壕が造られます。昭和19（1944）年7月には、戦局の更なる悪化に備えた二代園長早田皓が園内の丘陵に横穴を掘ることを計画し、働く入園者により現在も残存している避難壕を構築したようです。

現時点では、壕が集中して見つかっているのは、南北に延びる細長い丘陵の北側です。最も良好に残存しているのは、丘陵中央に位置する全長70mに及ぶ平面形は大きくY字状になる壕群です。丘陵南側には、3基の壕口が連接する壕群があるが、そのうちの1本の坑道は長さ18mに及んでいるか、とりつく小部屋が見られないため、未完成の壕である可能性もあります。丘陵北側には12基の壕口が個別に存在しているように見えるが、このうちの幾つかは本来は連接していたものが、後世の削平を受けたものと考えられます。

このように、各壕は幾つかの壕口があるが、その入口の広さは幅0.9m程度と狭く、内部に入る幅1.5m前後の坑道に、奥行1.5～3.0m前後の小部屋が取りつくという形になっています。壕内には、壁を掘り込んで灯りを置く場所や、棚状の凹み、木材や導線を支えるための壁に打たれた鉄釘などが多く残ります。また、扉が設置されていたと思われる岩盤の凹みや、カマド跡も見られます。



写真4 整然と並ぶ壕口



写真5 壕内に打たれた釘

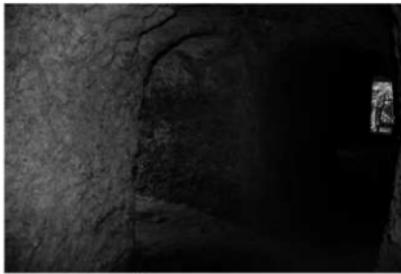


写真6 扉跡？の痕跡

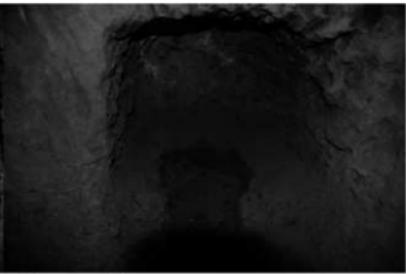


写真7 カマド跡

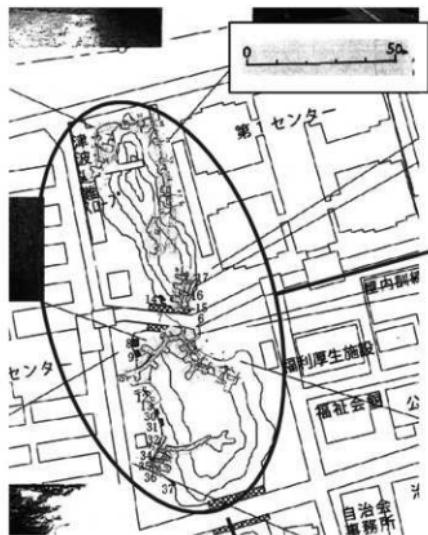


図 6 早田塙の現況分布図
(名護市教委提供未発表資料を改変して資料を改変して利用)

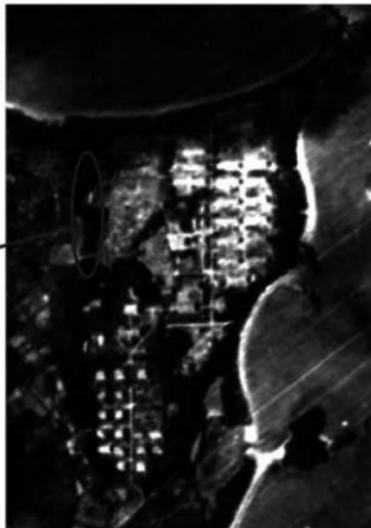


写真 8 1944 年 9 月 29 日米軍撮影

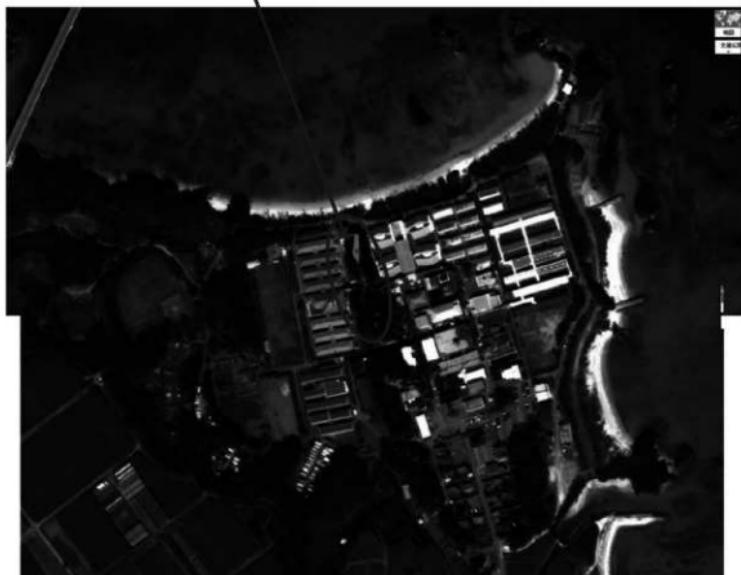


写真 9 現況

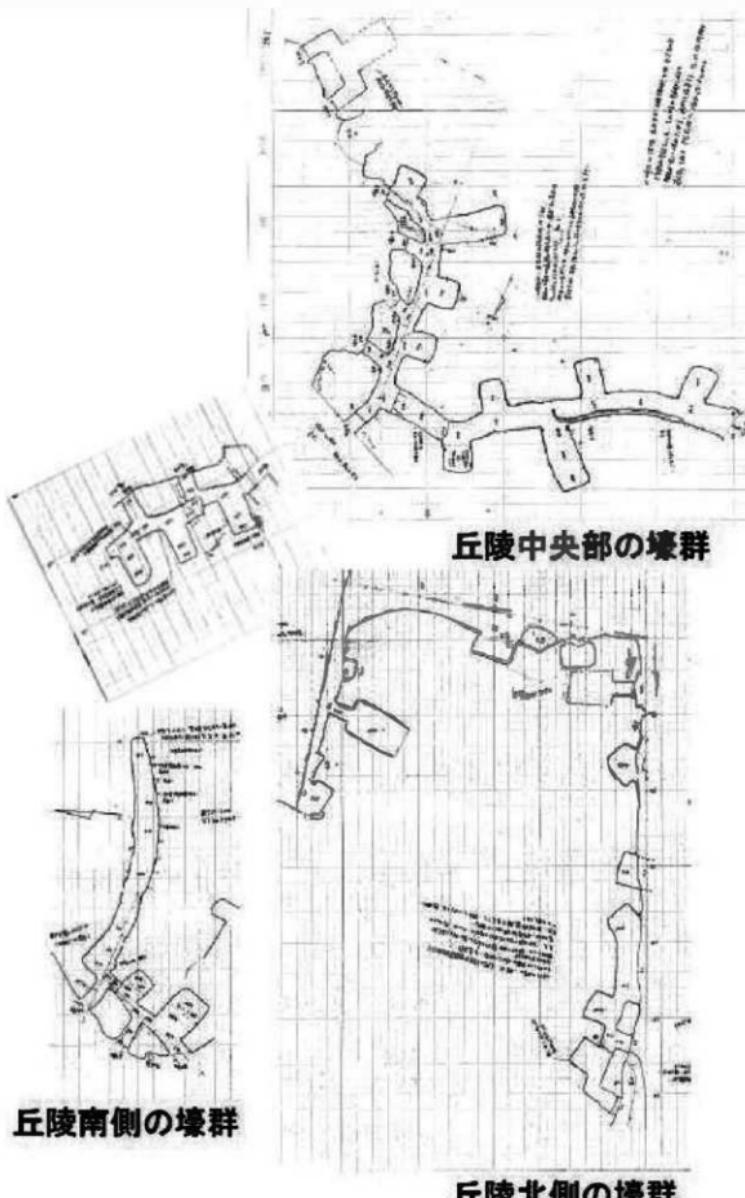


図7 早田塙平面図

ふなこしばる い せき 県内遺跡(船越原遺跡)

沖縄県立埋蔵文化財センター
宮城 淳一

調査の目的

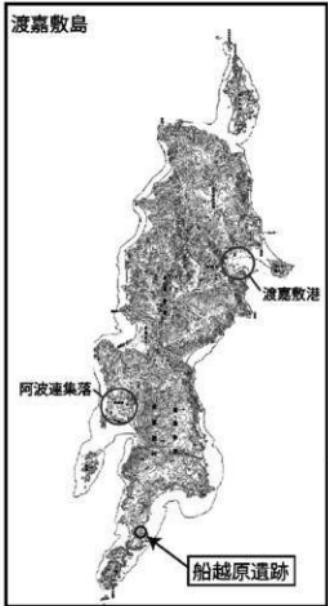
これまで埋蔵文化財の分布状況を把握が不十分であった慶良間諸島（渡嘉敷村・座間味村）において、平成 22～27 年度の予定で遺跡分布調査を実施しています。

平成 25 年度は、渡嘉敷村船越原遺跡の範囲確認調査を実施しました。

船越原遺跡の範囲確認調査

船越原遺跡は、今から 39 年前に砂取り工事の際に発見された渡嘉敷島南端の海岸砂丘に位置する縄文時代前期～弥生並行期（約 6,000～2,000 年前）の遺跡です。数少ない爪形文土器（約 6,000 年前）があること、周辺で石斧などの材料となる石材が多量に分布することから、考古学研究において注目されています。

しかし遺跡は砂丘上にあるため、大雨や風で崩壊が進んでおり、その保存が懸念されています。そこで、当センターでは、平成 22・23 年度に船越原遺跡周辺の地形測量を行い、平成 24・25 年度で範囲確認調査を行いました。



4

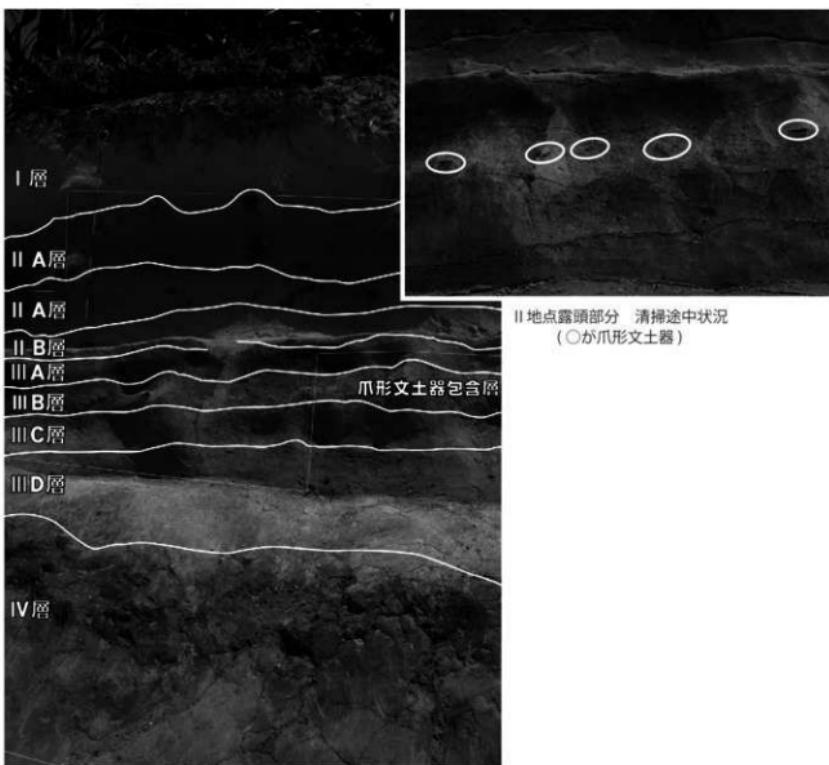


沖縄本島及び慶良間位置図

平成 25 年度の調査について

調査は遺跡の範囲を確認するために、爪形文土器が散在し、その包含層(III B 層)が確認されている II 地点と、過去に土器が採集された III 地点、IV 地点で試掘調査を行いました。

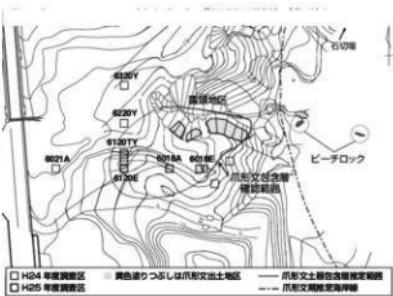
II 地点では 5 か所の試掘調査を行いました。II 地点における堆積の様子については、前年度の調査で I 層(現砂丘層)、II 層(旧地表・砂丘層)、III 層(黄褐色～浅黄色シルト砂層)、IV 層(明赤褐色砂層)、V 層(灰白色砂岩)の層序を確認しました。試掘調査を行った箇所のうち 6018 E で III B 層を確認しその層の中より土器片が出土しました。また、6120 E・T Y では III C 層の直上より土器片が出土しました。このことから、II 地点における III B 層は、海岸より西に約 150m の場所に直径 30m の範囲に広がっていると考えられます。また、6018 E では III B 層の上の III A 層より緑色片岩や砂岩などの石器に利用されることの多い石が集中して出土しました。III A 層及び石の周辺から出土した炭化物を利用して放射性炭素年代測定をおこなったところ約 4200 年前に堆積した層及び石であることがわかりました。このようなことから、船越原遺跡は石を利用する人達が活動した場所ではないかと考えられます。



船越原遺跡 II 地点層序

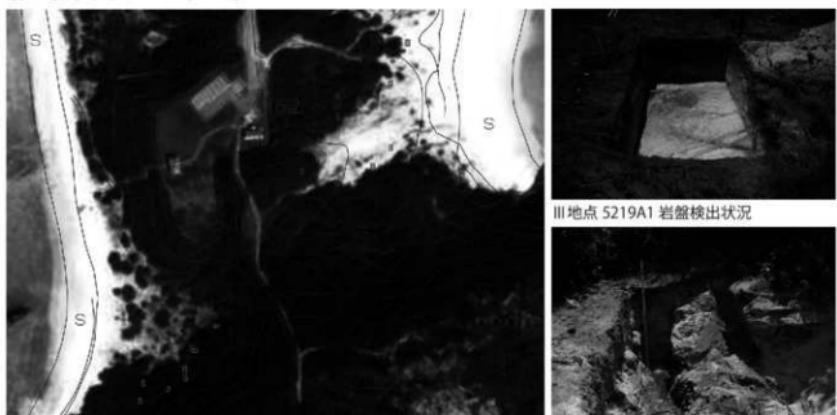


船越原遺跡 遠景(南より) 破線が船越原遺跡



6018A 磁片出土状況(西より)

III地点とIV地点では19か所の試掘調査を行いましたが、今回の調査では明確な遺構や遺物包含層は確認できませんでした。



今後の保存について

船越原遺跡のII地点の露頭面の調査は前年度で終了し、これ以上の崩壊を防ぐために、埋戻しを行い遺跡を保護しています。



船越原遺跡 遺跡保護状況

き ち な い ふ ん か ざ い お お や ま か ら ろ ー ば る だ い よ ん い せ き き ゆ な あ が い ば る だ い よ ん い せ き
基地内文化財(大山加良当原第四遺跡、喜友名東原第四遺跡)

沖縄県立埋蔵文化財センター

大堀 翔平

1 基地内文化財分布調査のあらまし

目的

沖縄県内の米軍基地や自衛隊基地内にある埋蔵文化財(≒遺跡)の範囲や性格を把握

→ 遺跡分布地図など、文化財保護のための基礎となる資料を作成

あらまし

平成 9 年度 文化庁の国庫補助事業としてスタート。

平成 11 年度 返還決定をうけて、特に面積が広く緊急性が高い普天間飛行場内で試掘調査を開始する。

平成 13 年度 宜野湾市教育委員会が参加。分担して調査を行うようになる。

平成 20 年度 重要施設や滑走路などの調査不可エリアを除いた普天間飛行場内の約 3 ~ 4 割の面積について試掘調査をほぼ完了、確認調査へ移行。

平成 21 年度 それまでの調査成果をまとめた『普天間飛行場内遺跡地図(中間報告)』を刊行。

平成 22 年度 大山加良当原(おおやまからろーばる)第四遺跡の確認調査を開始。

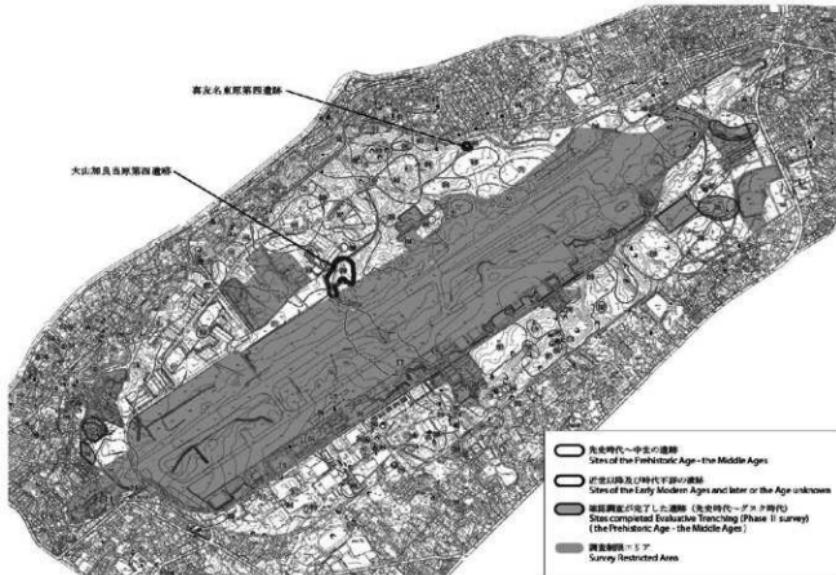


図1 平成 25 年度の調査箇所

2 大山加当原第四遺跡の調査とその成果

これまでの調査成果 平成19年度に当センターの試掘調査によって発見された遺跡で、これまでに近世・近代の溝状遺構や遺物廃棄土坑、弥生～平安並行時代末の焼土集中、縄文時代晚期頃の土器や磨製石斧、遠隔地石材などが出土しています。

平成25年度の調査と成果 平成25年度は遺跡の地層堆積状況などを調査するため、これまで調査を行ってきた3トレンチの端2か所でボーリング調査を行いました。

その結果、No.1・2ともに近世・近代の層（No.1・2の2層）は微粒炭が多く、耕作土層であることが指摘されます。これまでの発掘調査の成果や、昭和20年の航空写真でも遺跡周辺に畠が広がることからも窺い知れます。また縄文土器が出土する層（No.1の3層、No.2の5～7層）は、包含する炭化物の放射性炭素年代で約3800年前という測定結果が出ました。また土色は脱色し、養分も少ない土であることが分かりました。その結果、この地層は縄文時代の遺物を含む赤土が再堆積した後に、長年に及ぶ水の影響で養分が失われた土であると想定されます。そして、この地層とその下の赤土層が最も厚いことに加え、岩盤までの深度が、平均2.0mであるのに対して、No.1地点は約4.7m、No.2地点では約5.8mと深いことから、3トレンチは埋没谷であることを確認しました。よって谷状の地形に縄文時代の遺物を含む土が流れ込んで谷を徐々に埋めていく、その後に畠として利用されたという土地の履歴を知ることができました。



図2 大山加良當原第四遺跡のボーリング調査箇所
No.1とNo.2の二か所でボーリングを行った。No.2付近では前年度までの調査で縄文土器などの遺物が出土している。



写真1 ボーリング調査の様子

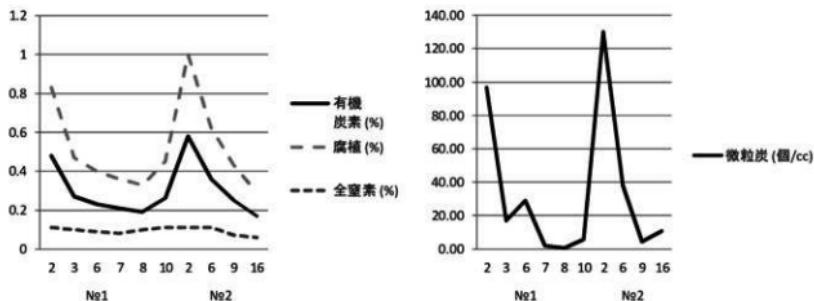


図3 土壌分析の主な成果

No.1・2ともに2層は微粒炭が際立って多く、人間活動の痕跡を示す。一方で3層以下は各要素とも低い数値となっており、土色の脱色も踏まえて水による溶脱作用の影響が考えられる。

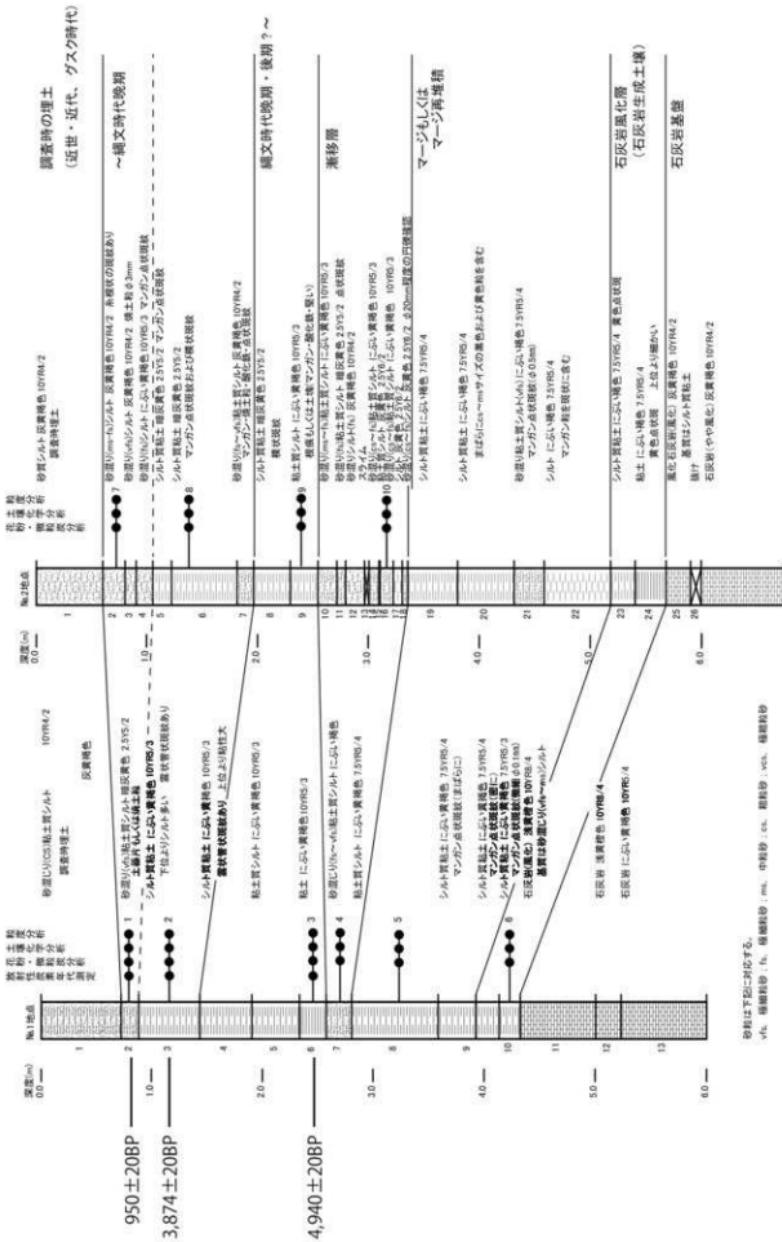


図4 大山加良当原第四遺跡 ボーリングコア柱状図

3 喜友名東原第四遺跡の調査とその成果

これまでの調査成果 基地内文化財分布調査事業の平成14・15年度の試掘調査によって縄文時代の遺物包含層が確認され、縄文時代の遺跡であることが分かりました。

平成25年度の調査と成果 試掘調査の成果を踏まえ、平成25年度は遺跡のさらに詳細な性格の把握や遺跡の範囲を確認するため、3つのトレンチを設定して発掘調査を行いました。発掘調査によって、近世・近代、グスク時代、縄文時代の3つの時代の遺構や遺物が出土しました。

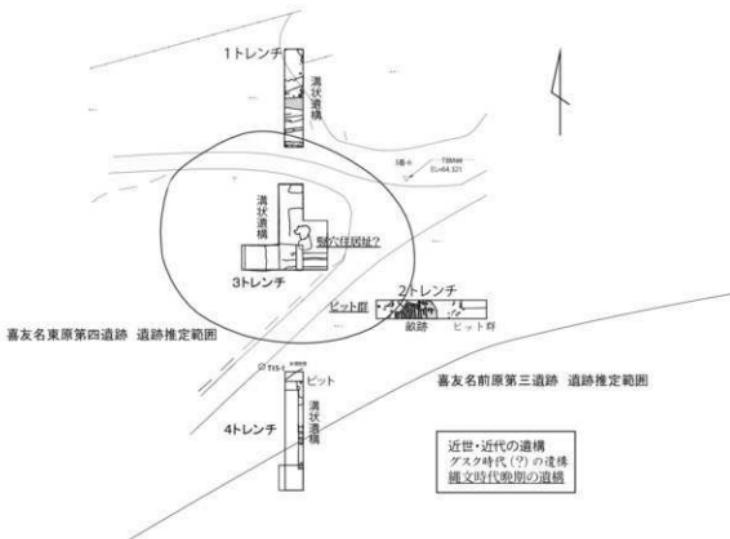


図5 喜友名東原第四遺跡のトレンチ設定と遺構分布

近世・近代の遺構は遺跡のほぼ全域、グスク時代(?)は遺跡の南東側、縄文時代晩期は遺跡中央部に分布している。なお4トレンチは平成26年度に調査を継続。

近世・近代 溝状遺構とその間に多くの鉄跡、歯跡が検出されました。溝状遺構は、1トレンチは東西方向に4条、3トレンチは東西2条、南北に1条が検出されました。特に3トレンチの溝状遺構は、溝内を石で埋めたものや側面に石積みを敷設したものがみられました。なお、これらの溝状遺構は昭和20(1945)年の航空写真にある畑の境界と概ね一致しています。また、2トレンチでは歯跡がみつかりました。この遺構は近代の層の下から検出されたので、近世頃の遺構と推定しています。遺物は沖縄産陶器を中心で、他に遊具や、キセル、かんざしなどが出土したほか、縄文土器もみつかっています。

グスク時代 この時代と考えられる遺構は南側で見つかり、全27基中26基のピットはまとまっています。これらのピットの中には、柱穴と考えられるものも含まれますので、グスク時代の頃には掘立柱建物跡が存在していた可能性が挙げられます。

縄文時代 遺構は2・3トレンチで検出されました。2トレンチではピット14基がまとまって検出され、この中には建物跡や柵列の柱穴と考えられるものが1基含まれます。遺構の周辺には縄文時代晩期の土器や石器石材が出土しました。また、3トレンチからは竪穴住居址の可能性のある遺構が検出されています。

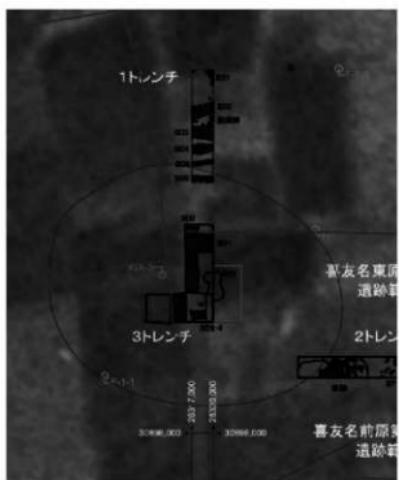


図6 溝状遺構と昭和20年航空写真重ね図
溝状遺構(黒)が畑(濃灰色)の境界と重なることが窺える。

この遺構は、3基もしくは4基が重なり合っている状況が窺えます。出土土器は、口縁部片の形状などから縄文時代最後の時期に当たるとみられます。この土器に付着した炭化物の放射性炭素年代により、およそ2400年前に使われたことが分かりました。遺構内より検出した炭化物の放射性炭素年代測定でもおよそ2400～2600年前という結果が出ているので、この遺構の使用時期はおおむねこの時期であると考えられます。ほかに敲石や石皿・台石といった加工や調理に用いられたと推定される石器が出土していますが、獣魚骨や貝などの食糧残滓は土の水洗選別を行ったにも関わらず、出土しませんでした。

一方で、琉球列島にはない黒曜石のフレイク4点やサメ歯も出土しています。黒曜石・サメ歯とも1トレンチでも1点出土していますが、この遺構に関連して出土した可能性が挙げられます。中でも黒曜石は県内でも出土事例が少なく、このように複数点が同じ遺構から出土した事例は極めて少なく貴重な成果です。蛍光X線分析によって、5点とも佐賀県腰岳産という結果が得られました。



写真3 3トレンチの溝状遺構
片側側面に石を積んで壁面を作るもの(左)や、溝内に石を詰めたもの(右)が検出された。



写真4 敵跡(2トレンチ)



写真5 グスク時代(?)のピット(2トレンチ)



写真6 縄文時代のピット群(2トレンチ)



写真7 穹穴住居址?(SX1・2・3)

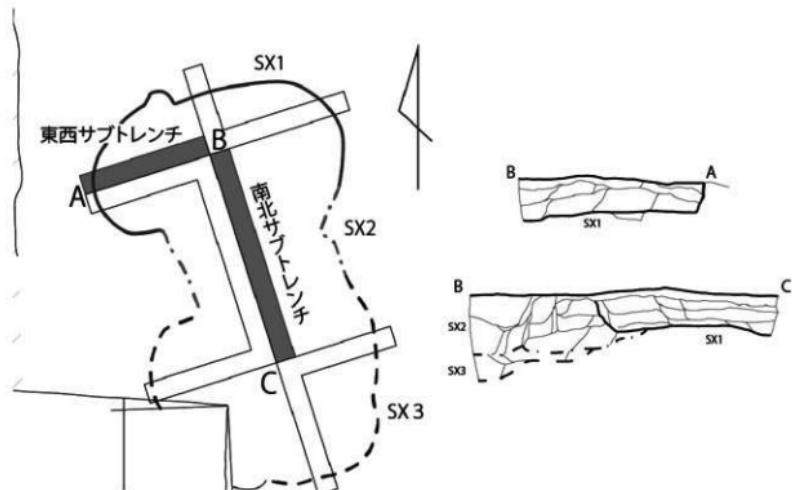


図7 穹穴住居址?(SX1・2・3)の切り合い関係

遺構はサブトレンチの詳細な検討により3基(もしくは4基)に分かれ、床面の位置の切り合い関係からSX3→SX2→SX1という変遷が窺える(下図)。

石鎚などの定形化した石器は出土しなかったので、石器の加工によって生じた剥片が残されたものと推定されます。他の石器の石材にも沖縄本島北部西岸や慶良間諸島、久米島の石材が用いられており、この遺構を利用した人々はかなり広域な活動範囲とネットワークを持っていたことが分かります。

旧地形 当時の地形を知るために、岩盤の確認も行いました。その結果、1・3トレンチは岩盤がおよそ1.5～2.0mで検出されたのにに対し、2トレンチはおよそ3.0mで検出されました。従って、2トレンチの部分が谷だったことが分かります。この旧地形と遺構や遺物の出土状況から、3トレンチを居住空間とし、谷状の2トレンチ側に不要になった土器や石器などを廃棄したと推定しています。

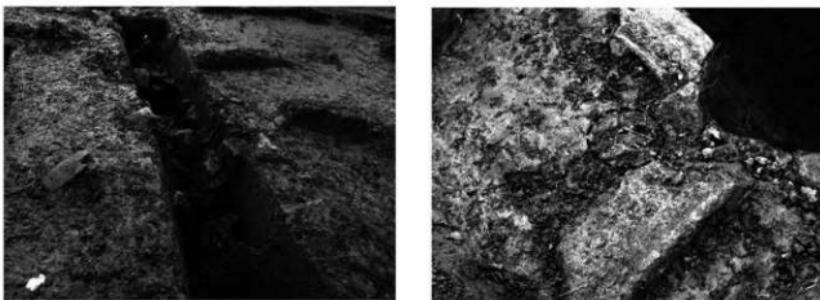


写真 8 穫穴住居址 ?(SX1・2・3) 内出土遺物

サブトレーンチからは大量の土器片が出土（左）。土器に混じって黒曜石片も出土した（右）。土器は口縁部片と胴部片が出土したが、なぜか底部片は出土しなかった。

試料番号	トレーンチ	遺構名	種類	補正年代BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代BP	Code No.
1	3トレ	SX1	炭化物	2,450±30	-29.49±0.63	2,520±20	IAAA-140016
2	3トレ	SX1	炭化物	2,520±30	-24.68±0.59	2,510±20	IAAA-140017
3	3トレ	SX1	炭化物	2,420±20	-27.31±0.63	2,460±20	IAAA-140018
4	3トレ	SX1	炭化物	2,460±20	-28.93±0.52	2,530±20	IAAA-140019
5	3トレ	SX1	土器付着炭	2,440±30	-24.08±0.59	2,430±20	IAAA-140020
6	3トレ	SX1	炭化材	2,460±20	-27.43±0.53	2,500±20	IAAA-140021
7	3トレ	SX1	炭化物	3,080±30	-28.33±0.34	3,130±30	IAAA-140022
8	3トレ	SX1	炭化材	2,400±30	-27.33±0.68	2,440±20	IAAA-140023
9	3トレ	SX1	炭化材	2,450±30	-25.53±0.70	2,460±20	IAAA-140024
10	3トレ	SX1・2	土器付着炭	2,580±30	-23.61±0.30	2,560±30	IAAA-140025
11	3トレ	SX1・2	炭化材	2,430±20	-27.65±0.45	2,480±20	IAAA-140026

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表 穫穴住居址 ?(SX1・2・3) の年代測定値

土器付着炭化物、遺構採取炭化物とともに概ね 2400～2500 年頃に收まり、この遺構が使われていた時期を窺うことができる。なお試料 7 のみ約 3000 年前となっているが、これは遺構最下層からの採取おそらく SX3 の年代とみられる。

現状の遺跡の評価 ①この場所の土地の履歴がほぼ残されている。縄文時代晩期末とグスク時代にかけて居住域として利用された後、近世以降には耕作地として利用されたことが窺えます。②縄文時代晩期末の景観。古地形の推定から、3 トレーンチの竪穴住居址は舌状台地に立地し、その後背谷の 2 トレーンチに土器・石器を廃棄したと考えられます。また近隣には喜友名東原ヌバタキ遺跡や伊佐上原遺跡群 A 地点・F 地点といった同じ頃の集落跡や竪穴住居址もあるため、この一帯は縄文時代晩期末の大規模な居住空間であったとみられます。③縄文時代晩期末のモノの移動。石器石材から、沖縄本島北部、慶良間諸島、久米島から石材を獲得しているほか、西北九州の黒曜石を交易によって入手するなど、かなり広域に活動していたことが分かります。以上のように、喜友名東原第四遺跡は学術的、地域の歴史を知る上でともに重要な遺跡と言えます。

しらほさおねたばるどうけついせき 白保竿根田原洞穴遺跡

沖縄県立埋蔵文化財センター

仲座 久宜

所在地：石垣市字白保

目的：重要遺跡範囲確認調査

期間：平成 25 (2013) 年 10 月 7 日～12 月 6 日

面積：約 20m²

時代：後期更新世～グスク時代

1 はじめに

琉球列島の島々は、琉球石灰岩で覆われた地域が多く、人骨が化石として残りやすいことから、旧石器時代の化石人骨が数多く出土することで知られている。これまで、沖縄島や伊江島、久米島、宮古島などの島々において、10 か所前後の遺跡が発見されているが、八重山諸島では未確認であつた。

このような中で、2010 年（平成 22 年度）に行われた白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査（以下「第 1 次調査」）で出土した人骨が、約 20,000 年前の後期更新世ものであることがわかり、その頃の石垣島に人類が到達していたことを明らかにした。

その後、沖縄県立埋蔵文化財センターでは、遺跡のより詳細な性格・範囲を確認する目的で、平成 24 年度から重要遺跡確認調査を行っている。平成 25 年度は 10 月から 2 か月間にわたり発掘調査を実施した。調査にあたっては、各種分析に支障がないよう、また、出土状況の再検証が可能なように、遺物の検出や記録、取上げ、運搬、サンプリングに至るまで慎重かつ迅速に行うよう努めた。

2 調査の概要

平成 25 年度の調査は、第 1 次調査時に残した断面観察用ベルト（畔）を中心に発掘を行った。

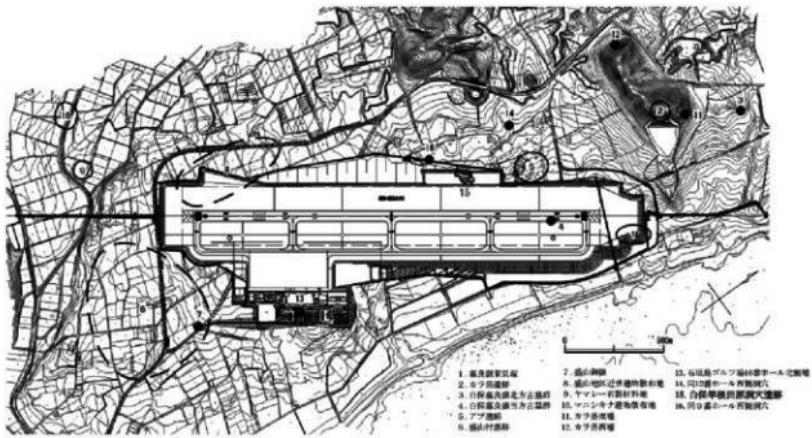
その結果、Ⅲ B 層（8,500～9,500 年前 BP）からは多量のイノシシ骨とともに、土器片、石材片を検出した。また、後続するⅢ C 層（16,000～18,000 年前 BP）においては人骨を多数検出した。特に G 5 グリッドにおいては、まとまりのある頭蓋骨とともに、周辺に上半身の骨が集中して出土する状況が確認され、人骨がある程度、原位置を保った状態で埋蔵されていることが確認できた。

今後は遺物の位置関係や接合状況ならびに、同一個体か否かを検討しながら出土状況をまとめるとともに、年代測定や DNA、形質学的な分析を行う予定である。

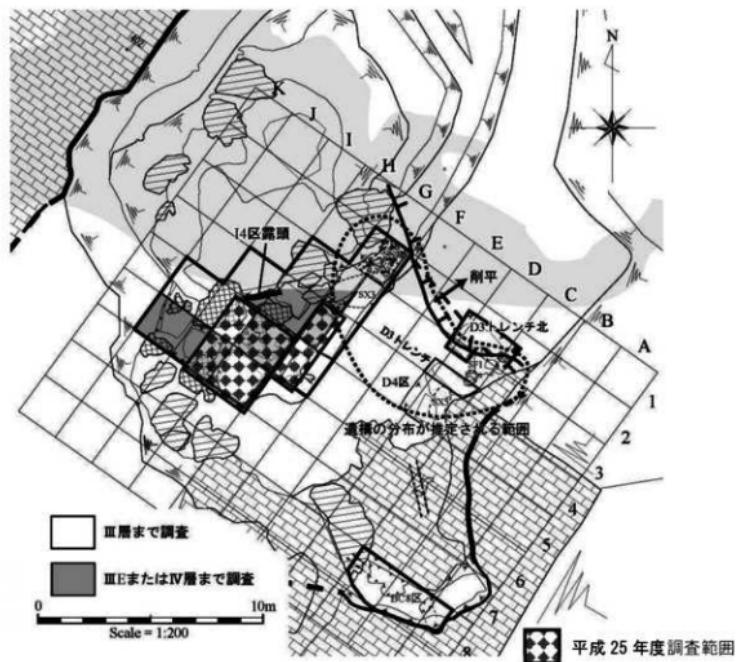
なお、調査期間中には、石垣市教育委員会及び日本人類学会の協力により、現地説明会と講演会を行い、多くの石垣市民に参加いただいた。

3 今後の計画

平成 27 年度まで確認調査を行うとともに、遺跡の適切な評価・保存法や、地域での活用法について検討し、その後調査報告書を刊行する予定にしている。



第1図 新石垣空港と周辺の遺跡



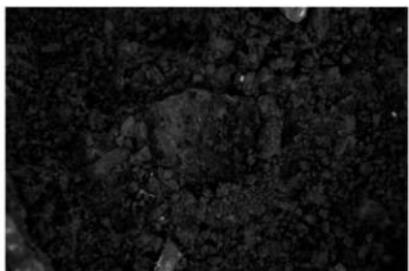
第2図 平成 25 年度調査範囲

白保半根田原洞穴遺跡の基本層序と主な遺構・遺物

層序	時代 (年代BP)	遺構	遺物(出土量: ○=多い、△=普通、△=乏しい)									
			人工遺物					動物骨				
			貝	石器	陶器	骨器	人骨	コ	カ	リ	ト	魚類
0層	現代	-						△	△	△	△	△
I層	中森期 (グスク時代・14~16世紀)	地床炉跡: 1基	△	△	△	△	△	△	△	△	△	○
II層	無土器期～中森期	津波堆積層か		△		△		△	△	△	△	△
III A1層	無土器期 (約200年前・寄生並行)	炭化物集中: 2基	△	○	△	○	△	○	△	△	△	○
III A2層	下田原期 (約400年前・禪文後期並行)	疊敷遺構	△	△	△	○	△	○	○	○	○	○
S層	下田原期 (約400年前・禪文後期並行)	崖葬墓	△	△	△	○	△	○	○	○	○	○
III B層	完新世前半 (8500BP~5500BP)	-		○	○	△	○	△	○	○	○	○
B層	後期更新世末 (12900BP)	-				△	○					
III C層	後期更新世 (16000BP~15000BP)	-				△	○	△	○	○	○	△
III D層	後期更新世	-					△	△				
III E~IV層	後期更新世 (20000BP~24000BP)	-				○	△	○	○	△	○	△
A層	更新世か	-					△	△	△	△	△	○
状況												
ゴルフ場建設時の盛土。												
中森式土器 中国産青磁 白磁 暗褐色器 タイ窓器種 胸器が含まれる。知跡の発見により海穴が生活に適した 環境であった可能性を示す。												
最大80cm厚の砂質の層で、化石ホーホルのほか全面に堆 積する。海産貝、枝サンゴ、砾石等含む。津波堆積層の 可能性あり。												
炭化物集中部には円礫や海産貝、イシシ骨を含む。												
下田原式土器や下田原期特有の骨・貝製品が出土する が、石斧が出土していない。												
イシシ骨が多數出土しておらず、中には解体骨が呑る資 料が含まれる。石器や石材がわずかに共伴して出土。												
出土するイシシ骨には解体痕がみられない。												
人骨を多く含む層。解剖学的位置を保たないが、接合可 能な頭蓋などがあり、保存状態は良好。												
III C層とIII E層の漸移層で遺物にはほとんどみられない。 複数個体の入骨やトリ、ネズミ等の小動物骨が多数出土 している。												
層位的にIII E層・V層の下位に位置づけられることがある。出土する貝は陸産貝。												



図版1 白保竿根田原洞穴遺跡調査状況



図版2 H6 土器片出土状況



図版3 H6 人骨検出作業



図版4 遺物検出・平面図作成作業



図版5 現地説明会の状況

沖縄県立埋蔵文化財センター
行事予定のご案内

◇「白保竿根田原洞穴遺跡」関連イベントを企画中です。

企画展

■「白保竿根田原洞穴遺跡」関連企画展（予定）

日時：平成 27 年 1 月頃

会場：沖縄県立埋蔵文化財センター企画展示室

講演会

■「白保竿根田原洞穴遺跡」関連講演会（予定）

日時：平成 27 年 1 月頃

会場：沖縄県立埋蔵文化財センター研修室

講師：未定

※先着 140 名 予約等不要・参加無料

※詳細が決まり次第、当センターホームページやマスコミ等を通じて広報致します。

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県那覇市西原町字上原 193-7 (琉球大学附属病院横)

TEL 098-835-8752

FAX 098-835-8754

- 開所時間 午前 9 時～午後 5 時まで（入所は午後 4 時 30 分まで）
- 休 所 日 毎週月曜日、国民の休日（子どもの日、文化の日を除く）
年末年始（12 月 28 日～1 月 4 日）、慰霊の日（6 月 23 日）
※祝日と月曜日が重なった場合は、翌火曜日も休所